
Potato Salad in a small bowl.

Yoi

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P o t a t o S a l a d i n a s m a l l b o w l .

【コード】

N 8 7 1 4 G

【作者名】

Y o i

【あらすじ】

ある静かな夜。隣の席で眠る後輩を見つめながら、男は一人、遠い昔の話を思い出していた。

隣の机に座る少女が机に伏せるようにして眠っている。
私は彼女を気に掛けながらも、目の前のパソコンに向かい、仕事を続ける。

彼女は昨日も遅かったのだろうか。

仕事を立て込むと、眠れなくなることも多いのだそうだ。

私があることを尋ねると、

「……昨日は、ちゃんと寝ましたけど」

そう言っつて、頼りなげに笑った。

「……でも、ねむいんです。……なんか」

彼女はそう言っつて、また机の上に突っ伏してしまった。

私は声も出さずに笑っつて、お疲れ、と小さく呟いた。

彼女の向こうの窓に見える景色は、もうすっかり暗くなっている。
遠く、駅前の高層マンションの明かりが、はつきりと夜空に浮かんで見える。その先端の赤い明滅する光りが、星のない虚空に、受け取る者の無い信号を放ちながら、ただひたすらに、無事にこの夜が明けのを待ちづつつけている。

ふと、視線を感じて、隣を見れば、彼女が机に伏せたまま、顔を横に向けて、私をじつと見つめていた。

私の視線を感じると、彼女は咄嗟に私から目をそらして、向こうを向いてしまった。

私は再び、声のない笑いを漏らした。

「……昔、そう言う目で、こつちを見てた人がいたよ」
私は、小さな声で、独り言のように呟いた。

「……その人とは、どうなったんですか」
彼女は向こうを向いたまま、独り言のように言った。

「……さあね。……忘れてしまったよ」

「……なんだ」

彼女の溜息が聞こえた。

「……つまんない」

私が彼女に言ったことは、言うまでもなく事実だった。私は確かに昔あのような瞳で私を見つめていてくれた人が傍らにいたことを覚えていて。彼女もいつも疲れた顔をして、同じ研究室でもなかったはずの私の机の隣に、いつも突っ伏していた。

逃げるようにやってきて、一眠りして、帰って行く彼女。

その背中に掛ける言葉を知らず、私はいつも、見守ることしかできなかった。

「……先輩」

向こうを向いたまま、彼女が呟いた。

「……その人とは、本当に何も、なかったんですか」

私はしばらく、黙り込んだ。

彼女との思い出を一つ一つたどってみた。

しかし、思い出すのはどれも、眠っている彼女だった。

笑顔でも、泣き顔でもなく、何故か疲れ果てて傍らでうずくまるように眠っていた、彼女の姿だけだった。

「……何も。……ただ、」

「……ただ？」

「……ポテトサラダ」

「え？」

私は彼女とのほとんどたった一つの思い出を思い出そうとしていた。いつか彼女の作ってきてくれた、小さなカップのポテトサラダ。ほとんど料理など出来ない、はつきり言っていた彼女が、どうしてそんなものを作る気になったのか私には解らなかった。

「……その子が、ポテトサラダを作ってきてくれたことがあったんだ。たった一回だけだね」

「……それ、」

彼女がこちらを向いた。

「……おいしかった、ですか」

私はその味を思い出していた。

ポテトとマカロニと、細く切ったキュウリとタマネギのようなものが顔を出していたのを、おぼろげに覚えていた。だが、その味付けは本当に薄味で、塩気が全くないのだった。彼女の父は塩分を控えるように医者から言われていたらしく、それで彼女の家庭では塩を控えるようにしていたのだと、私は聞いたことがあった。

それにしても、あの味の薄さは、それとはまた違っていた。

おそらくは、過剰な塩分はいけないという彼女の考えが先走って、おいしい味付けと言うものよりも優先してしまったのだらうと私は思った。

行動的に人前で振る舞う割には、肝心な時には一転して、ものを考

えすぎてしまう彼女の性格が、そうした味の薄いポテトサラダを作らせてしまったのだろう。わたしはそう思っていた。

「……まあ、まあだったかな」

私は答えた。

「……優しい、味付けだったよ」

「……ふうん」

彼女は不思議そうな顔をして言った。

「……優しい味付け、ですか」

あのような薄味のポテトサラダには、今後も会うことはないだろう。わたしは思った。

彼女も今頃は上達し、もっとおいしいサラダを作れるようになっていくのかも知れない。振り向いてほしい、何処かの、知らない誰かのために。

だが、もう誰も知らないのだ。

あのときの薄味のポテトサラダを愛していた人間も、この夜空の下に、いないわけではなかったことを。そして、その儂い味の中に、小さな幸福を噛みしめていた人間が、僅かにでもいたのだということ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8714g/>

Potato Salad in a small bowl.

2010年10月9日13時59分発行